

中村 治『洛北岩倉と精神医療： 精神病患者家族的看護の伝統の形成と消失』

——マンネリ精神医療史を打ち破る新たな「岩倉」像——

橋 本 明

京都・岩倉は精神医療関係者にはよく知られている。しかし、多くの人は以下に示す言説を疑うこともなく、そもそも疑うすべもなく、ただ知っている「つもりになっている」だけではなかろうか。すなわちその言説とは、平安時代の後三条天皇の皇女が精神病を患ったが、岩倉・大雲寺の霊泉により治癒したという伝説から、多くの精神病患者が集まり、やがて茶屋・宿屋や農家での患者預かり（家族的看護）へと発展した。近代になると、精神病院での閉鎖的な治療環境とは違う、保養所（かつての茶屋・宿屋）での自由な雰囲気は患者が暮らす場所として理想的であると海外でも知られるようになったが、戦中・戦後の食糧難、精神医療の法制度の変化などによって、患者預かりは消滅した。振り返れば、戦前の岩倉のシステムは、入院医療中心の精神医療に対抗する地域精神医療の先駆けとして高く評価される云々、というものである。

だが、後三条天皇の伝説以上に伝説的で陳腐化した、従来の岩倉言説に修正をせまるものが今回の中村治氏の著作だと言えよう。本書は1990年代終わりころからの中村氏の研究活成果、および氏が京都大学に提出した博士論文（「洛北岩倉における精神病患者預かりの伝統の形成と消失」）のダイジェストである。構成は、「はじめに」、「序章」、それにつづく24個の章と「終章」、さらに「参考文献」「岩倉精神医療史年表」「おわりに」であり、以下でその内容を簡単に紹介したい。

第1章から第8章は、おもに江戸時代までの岩倉という土地および大雲寺における精神病患者参籠

の歴史を述べている。記録を見るかぎり、精神病治癒を願って大雲寺に参籠したのが確実な最初の人は、明和2（1765）年の室町錦小路下町の住人で、岩倉と精神病との関わりは意外に新しいことになる。後三条天皇の皇女が岩倉で癒えたという伝説は、大雲寺自らが効能を記した「一種の広告」で、「その体裁から見て近世の作」である可能性が高い。いずれにしても、岩倉が患者預かりで栄えるのは江戸時代後期となる。それに対して、明治期の開明的な京都府官吏は岩倉の患者処遇のひどさを批判し、岩倉および（同じく京都の）久世の患者受け入れを禁止し、そのかわり明治8（1875）年に京都癲狂院（わが国最初となる公立精神病院）を設立して患者を救済した、というのが従来の岩倉の近代化に関わる大方の理解である。

だが、中村氏は第9章から第11章までの記述で、このような理解に疑問を呈している。氏は「京都癲狂院設立をめぐる不自然さ」および「岩倉と久世における精神病患者処遇批判の不自然さ」を挙げる。当時の精神病患者処遇の全国的な水準を考えれば、岩倉や久世だけがとりわけ劣悪だと批判されるのはおかしい。また、（現在は国宝になっている）南禅寺方丈に京都癲狂院が設置されたのも不思議である。これらの点について、「京都に癲狂院を設けたのは、貴顕紳士や華族が身内の「厄介之輩」を岩倉に預けて東京へ行ってしまふ事態に対処するため」であり、一方「日本でも欧米各国のように癲狂院を設け、治療を施していることを外国人に示そうとして」わざわざ人

目につく南禅寺方丈に設置したのではないか、中村氏は大胆に推論している。

次いで、岩倉の精神病患者預かりの最盛期にあたる明治・大正・(戦前の)昭和期の歴史を扱っているのが、第12章から第22章までである。ここでは、岩倉生まれ、岩倉育ちで、いまでも岩倉に暮らしている中村氏の聞き取りの成果が活かされている(私は何度も中村氏とともに国内外をめぐるは、精神病の「治療の場所」で聞き取りを繰り返してきたが、インフォーマントとの会話を楽しみながら情報を聞き出す姿勢を氏から学ばせてもらっている)。本書では保養所の日常をたとえば次のように紹介している。「(西川保養所の)患者は朝食後、蓄音機を鳴らしてもらったりしていた。散歩は朝が多い。行き先は、1 km ほど離れた三宅八幡、同志社高等商業学校方面などが多かった。(中略) 昼食は、野菜を煮たもの、じゃこ、つけもの、ごはんをお櫃に1杯。患者が食べ終わると、千代氏(注:保養所の手伝い)たちが食べ、あとかたづけ。その後、洗濯物の取り入れ。昼の2時ごろから患者は風呂に入る。」などと、3時のおやつ、夕食、就寝までの様子を淡々と描く。

第23章は「岩倉において家族的看護を可能にしたもの」を考察している。岩倉の地理的環境、地域経済、伝統に支えられた住民の意識や行動などの点から、10の「可能にした」要素があるという。本書では、定義温泉(宮城)や瀧澤不動尊(群馬)など、かつて日本各地に存在した伝統的な精神療場の場所との比較をとおして、岩倉の特殊性と普遍性をより鮮明にあぶり出している。だが、このような場所がたどった道と同じように、昭和25(1950)年の精神衛生法施行以前からすでに岩倉も衰退しはじめていた。第24章の「暮らしの変化と精神病患者家族的看護の伝統の消失」では、岩倉で精神病患者預かりが衰えた原因として「患者預かりによる経済的潤いの減少」「農作業や暮らしの機械化」などを挙げている。

中村氏は「終章」で障害者・高齢者の地域生活や介護の問題にも言及し、患者預かりの伝統は消えたものの、岩倉は決して歴史的な存在ではなく、現代的な問題の渦中に置かれていることも強調している。(なお、ここで取り上げた中村氏の著作は、2013年に世界思想社より刊行された。)